

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-3

麻里子はいくぶん緊張しながら相手の動静を見守っていたが、何か確信を得たかのように黙ったまま眼で微笑して頷いた。

「ないんだね！」と辰巳は心をくすぐられる女の目線による癖に苦笑いを浮かべて、それでもなお念押しをした。

「あんずの里に昔から中堅クラスの食品会社はありますが、杏仁を材料にした商品は扱っていませんでした。種は捨ててしまうそうなので、正味20kgばかり取っておいてもらいました」

「何に使うのか探られなかったのかね？」

「そこの常務に頼んだのですが、当然ながら聞かれましたけれど、種の量も少なかったですし、彼とは青年会議所で同じ役員をやっていたこともあって、お茶を濁しても不審がられませんでした」

「ほぉ～、幸運としか言いようがないね。で、年間にしてどの位の量の種が見込められるかな？」と辰巳は前のめりに畳み掛けて訊いてくる。

「話が性急すぎませんか？」、信じられないという面持ちで麻里子は男を見つめた。

「分かった。話を変えよう。イタリアのリキュールでアマレットは知っているよね？」

「真紀さんの電話で今日知りましたので、早速ネットで調べておきました」

「そうだったのか！貴女がどんな考えで試みたのかは別として、偶然にもイタリアへの道に繋がったんだ。ストーリーは、そんなに構わないよね？」と辰巳は言って、片目をつぶって笑った。

「商品価値はあるのでしょうか？」と麻里子は訊ねてから、自分も性急すぎているのではないかと一顧していた。

「もちろん」と辰巳は言ってから、「テイスティングさせてもらって、憶測が確信に変わった」と言い切って、目を細めて女杜氏の顔を凝視した。

「まだ信じられませんが、希望の光が見えてきたような気がしています」と麻里子は思いの丈をぶつけるように言った。

「偶然の邂逅がもたらした産物だね。それにしても、これだけ好条件が揃うのは何かの運命を感じるな。また、お叱りを頂戴しそうだが、容器の素材やデザインや容量など早急に煮詰めるとして、製造ラインは我が社の工場を使えばいい。貴女にこの商品の名付け親になってもらいたいのだが、どうだろう？」

「私がですか？」

「そう、出資者からの熱い思いを分かってもらいたい」

「もうスタートしたのですね？」

「あらかた」と辰巳はきっぱりと言った。